インド思想史学会　　第33回学術大会

（対面･オンライン併用）

プログラムと発表要旨

Association for the Study of the History of Indian Thought

The 33rd Annual Conference (Face-to-face & Online)

26 Dec 2026 (Sat.)

Programme and Abstracts of Papers

開催日：2026 年 12 月 26 日（土）

会 場：　京都大学 文学部校舎2階第7講義室

京都市左京区吉田本町　京都大学大学院文学研究科･文学部

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/access/



連絡先：〒 606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学文学研究科インド古典学研究室気付インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-2477（天野）

E-mail: hit_office@googlegroups.com

Website: https://indosg.org/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない場合は、メールアドレスが未登録ですので事務局までお知らせください。

インド思想史学会　第 33 回（2026 年度）学術大会のご案内

インド思想史学会会長　　赤松明彦

インド思想史学会第 33 回学術大会を下記の通り開催いたします。皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日　　2026 年 12 月 26 日（土）

対面による現地開催を主とし、オンライン（Zoom）を併用します。オンライン参加者は、本プログラムの最終ページに記載されたURLあるいはQRコードを通じて事前登録をしてください。登録後、ミーティング参加に関する情報を含めた確認メールが届きます。

会　場　　京都大学文学部校舎2階第7講義室
（理事会　11:00 – 11:30　　京都大学文学部校舎2階第7演習室）

参加受付　12:30 から　京都大学文学部校舎2階第7講義室前
参加費：1,000 円　　懇親会費：一般 5,000円、学生 3,000円（当日受付）

※ オンラインは会員・非会員とも参加無料。12:30からZoomを開場。早めに入場ください。

研究発表者および発表題目

13:00 – 13:50　　辻 春樹 （東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC1）
「*Kumārasambhava* 1.7 に対するヴァッラバデーヴァ注釈本文の形成」

13:50 – 14:40　　柴 優人 （広島大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC1）
「後期インド古典詩学におけるマドヴァ派の言語機能論」

14:40 – 15:30　　川村 悠人 （東京大学東洋文化研究所准教授）
「サンスクリット詩における人名並置法」

~~~~~ 休憩 ~~~~~

15:45 – 16:35　　廣瀬 勤 （京都大学大学院人文学連携研究者）
「Jaiminīya-Brāhmaṇa 3.190 と Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa 14.4.7
――平行伝承の構成と叙述――」

16:35 – 17:25　　手嶋 英貴 （龍谷大学教授）
「ヴェーダ祭祀のマントラにおける*svāhā*の用法」

総　会　　17:25 – 17:45　　引き続き同会場（第7講義室）、同URL（Zoom）で

懇親会　　18:00 – 20:00　　文系学部校舎1階「ぶんこも」にて
~~~~~

Association for the Study of the History of Indian Thought
Programme of the 33rd Annual Conference

AKAMATSU Akihiko, President

The 33rd annual conference of the Association is to be held as follows. We will cordially invite you to the conference.

Date and Time:	26 Dec 2026 (Sat.), from 13:00
	Board Meeting: 11:00 — 11:30（Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Seminar room 7）
Method:	Face-to-face meeting/Online meeting by Zoom （Those who wish to participate online are asked to pre-register via the URL or QR code provided on the final page of this programme. After pre-registering, the online participants will receive an email explaining how to access the conference room. Zoom meeting is open from 12:30）
Venue:	Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Lecture room 7

Programme

13:00 — 13:50 TSUJI Haruki (JSPS Research Fellow (DC1), The University of Tokyo)
"Textual Strata in Vallabhadeva's Commentary on *Kumārasambhava* 1.7" [in Japanese]

13:50 — 14:40 SHIBA Yuto (JSPS Research Fellow (DC1), Hiroshima University)
"The Madhva School's Theory of Verbal Functions and Its Influence on Late Sanskrit Poetics" [in Japanese]

14:40 — 15:30 KAWAMURA Yuto (Associate Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo)
"Poetic Pairing in Sanskrit Poetry" [in Japanese]

~~~~~ Break ~~~~~

15:45 — 16:35 HIROSE Tsutomu (Collaborative Researcher in the Humanities, Graduate School, Kyoto University)
"Jaiminīya-Brāhmaṇa 3.190 and Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa 14.4.7: The Structure and Narration of Parallel Traditions" [in Japanese]

16:35 — 17:25 TESHIMA Hideki (Professor, Ryukoku University)
"The Uses of '*svāhā*' in Vedic Ritual Mantras" [in Japanese]

Plenary Meeting 17:25 — 17:45 (Continued in the same room/Zoom meeting)

Banquet 18:00 — 20:00 (Multipurpose space BUNCOMO)
~~~~~

Kumārasambhava 1.7 に対するヴァッラバデーヴァ注釈本文の形成

辻 春樹

（東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1）

カーリダーサ作『クマーラの誕生』（*Kumārasambhava*）に対するヴァッラバデーヴァ（カシミール、9–10 世紀頃）の注釈は、同作品に対する現存最古の注釈と考えられ、カーリダーサ作品の初期の本文と解釈を知るうえで重要な資料である。

Murti［1980］は、デーヴァナーガリー文字写本に伝わる注釈本文に比べ、シャーラダー文字写本に伝わる注釈本文がより古く、原注の姿をよく保持していると判断し、3 本のシャーラダー文字写本を主に用いてヴァッラバデーヴァ注を校訂した。ただし、Murti の校訂には、オックスフォード大学ボドリアン図書館所蔵のシャーラダー文字写本（MS Stein Or. d. 74、以下 O）が利用されていない。発表者は写本 O 全体の画像を入手し、Murti の用いたシャーラダー写本 3 本との比較を進めている。書写上の特性から O は Murti の利用した 3 本に比して古い伝承形態を保持していると考えうるものの、それだけではシャーラダー写本の伝承のなかで O をどのように位置付けたら良いか判断することはできない。そこで本発表では O を位置付ける手がかりとして、第 1 章第 7 偈の注釈本文に着目する。

第 7 偈では、半神族の娘たちによって文字が書き込まれた樺の樹皮が斑点を帯びた象に喩えられる。当該箇所で O が提示する注釈は、前述の 3 写本の提示する注釈とは全く異なっている。第 1 章の他の箇所においては、O の提示する注釈本文の読みは多少の異同こそあれ、Murti の用いた 3 写本のいずれかの読みと一致しており、第 7 偈に対する注釈は特異な例である。

既存の 3 写本のうち、2 本は第 7 偈に対して長い注釈を、残る 1 本は短い注釈を伝えている。本発表では、デーヴァナーガリー文字写本に伝わる注釈本文との比較に基づいて、これらのうち長い注釈は短い注釈を増広したものであることを提示する。その上で、この増広部分は O に伝わる注釈本文よりも後の段階で成立したと考えられることを指摘する。増広部分の議論は、O において展開される主張に対する直接的な反駁として読むことができるためである。本発表では、このような分析を通じて O の有する資料的価値を示すとともに、注釈本文の形成過程の一端を明らかにする。

なお、発表者による写本 O の調査は現段階では第 1 章の部分に限られており、未調査の部分にも O 独自の読みが含まれている可能性がある。また、1.7 のように注釈全体に亘るものではないが、注目すべき異読が第 1 章にも相当数含まれている。こうした箇所の検討を通じて O の来歴をさらに詳しく解明することは、本研究の今後の課題である。

後期インド古典詩学におけるマドヴァ派の言語機能論

柴 優人

（広島大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC1）

後期インド古典詩学の栄華は南の巨匠アッパイヤ（16世紀）と敵対者ジャガンナータ（16世紀から17世紀）による詩学論争で築かれた。中世カシミールで体系的な完成を迎えた詩学理論の再検討と深化を目指した両者の論議により幕を開けた後期インド古典詩学の言語機能論に、マドヴァ派の著作との思想的連関が認められることを本発表で指摘する。

具体的な検討対象としてアッパイヤの言語機能論Vṛttivārttikaを軸に据えて、彼の特異な詩学思想の典拠の一つとなったと推察されるマドヴァ派の学匠ヴィヤーサティールタ（15世紀から16世紀）の大著Tarkatāṇḍavaにおける三言語機能論（Vṛttitrayavāda）の分析を行う。近年のヴィヤーサティールタ研究の動向については、Nyāyāmṛtaにおけるmithyātva定義批判やガンゲーシャとの思想的交渉、更にはアッパイヤの命令論Vidhirasāyanaと絡めた聖典解釈学の論争史も徐々に解明されつつあるが、他の論題の多くは未だ手付かずのままである。言語機能論に限って言えば、サンスクリット解説本Satyanaranayanacharya 2005やK. T. Pandurangi校訂本の序説における概要提示が関の山であり、アッパイヤの議論との繋がりや詩学を含めた一連の思想史の考察は多くの検討の余地を残す。

一方のアッパイヤの著作Vṛttivārttikaも、Gerow 2001の訳註研究の出版以降、際立つ成果は出てきておらず、現状Vṛttivārttikaの議論分析はGerow 2001の訳註と僅かなヒンディー語・サンスクリット語の研究資料で知り得る範囲に限られる。マンマタ等の旧詩学説への痛烈な批判で認知されるVṛttivārttikaについて、詩学内部の位置付けは勿論、他の学統との影響関係は未だ藪の中である。本発表で扱うヴィヤーサティールタからの影響は、例えば直接表示機能（abhidhā）の定義śaktyā pratipādakatvam－これは後に詩学者ジャガンナータのRasagaṅgādharaで批判された－にもある。この問題の定義の真意について、Gerow 2001は可能性の一つとしてシヴァ教のśakti概念・用語法に立脚したものとする若干の考察を註記する。しかし当定義はヴィヤーサティールタの言語機能論に裏打ちされた産物であろう。

本発表の目的は、先行研究で不明瞭のまま放置されたVṛttivārttikaの論説をTarkatāṇḍavaの言語機能論と照らして深掘りし、後期詩学書とマドヴァ派の言語理論の関連性を剔出することである。またその際にTarkatāṇḍavaの批判対象となる新ニヤーヤの学匠ガンゲーシャ（14世紀）によるTattvacintāmaṇiの言語機能論（śaktivāda）も検討対象に含め、Duquette 2016が指摘した、アッパイヤがガンゲーシャとヴィヤーサティールタの論争を巡り是々非々の態度を示していることが当該の一連の言語機能論にも符合することを言及する。

サンスクリット詩における人名並置法

川村 悠人
（東京大学東洋文化研究所准教授）

豊富な屈折変化をもつサンスクリット語では、語順は比較的自由であることが知られている。しかし、だからといって、サンスクリット語の使い手が語順に全く無関心であるわけではない。Renou 1980: 128は美文詩（*kāvya*）において語順の自由度がかなり高いことを指摘しているが、そのように語順が自由であることは、語順を活用した詩的な技巧を可能とする。したがって、詩人たちが何を表現しようとしたかを考えるためには、当該の詩がどのような語順で語られているかに注意を払う必要がある。

Lienhard 1984: 5–8や横地 2008: 104–106が扱う『雲の使者』（*Meghadūta*）第99使節には、*aṅgenāṅgaṃ . . . viśati*「体によって体へ . . .［夢想にのって］入る」というように恋人同士の身体を表す*aṅga*という語を並置するとともに、それぞれを修飾する形容詞類をもすべて並列させるという技巧が見られる。また、Shulman 2014: 45–46が取り上げる『ラグ家の系譜』（*Raghuvaṃśa*）第7章第21–22詩節では、結婚する二者の手を表す語*hasta*が、*hastena hastaṃ pragṛhya*「手で手をとって」というように両隣に配置されている。いずれの例も、特別な関係にある二者の身体部位を表す語を並置することによって、言葉の面から二者のつながりを表すことに成功している。

本発表では、サンスクリット詩には上記のように二者の身体部位やその修飾要素を表す語句を並置する技巧だけでなく、二者を指す呼び名を両隣に配置することによって詩的な効果を狙う技巧が存在することを指摘する。例えば『マハーバーラタ』（*Mahābhārata*）第1巻第122章第47詩節cd句では、カルナとアルジュナの呼び名が隣同士に置かれることで、両者の競い合う様が効果的に語られている（*spardhamānas tu pārthena sūtaputro 'tyamarṣaṇaḥ*「一方、激しい敵愾心をもって、御者の息子［カルナ］はプリターの子［アルジュナ］と競い合いながら」）。

特定の二者が有するつながりを最も強く表そうと思えば、『ラグ家の系譜』第1章第1詩節に出る*pārvatīparameśvarau*「山の娘と最高支配神」のように並列複合語（*dvandva*）を形成して、言わば両者を最大限に近接させる手法があるが（ここでパールヴァティーとシヴァの一体性を表すために並列複合語が使用されていることは*vāgarthāv iva sampṛktau*「言葉と意味のように合一している」という同詩節中の比喩表現から明らかである）、並列複合語に組み込まれた2語は同格の関係をもたざるを得ない。

特定の二者の呼び名を並置する技巧は、それらが異なる格語尾をとる必要があるときに、両者の緊密な関係を言葉の上で示し、当該場面に特別な印象を付与するものとして詩人たちが用いた仕掛けの一つであったと考えられる。

引用文献

Lienhard, Siegfried (1984) *A History of Classical Poetry: Sanskrit – Pali – Prakrit*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Renou, Louis (1980) “Grammaire et poétique en sanskrit.” In *Études védiques et Pāṇinéennes*. Tome VIII. Seconde édition. Paris: Collège de France, Institut de civilisation indienne, 105–131.

Shulman, David (2014) “Waking Aja.” In *Innovations and Turning Points: Toward a History of Kāvya Literature*, edited by Yigal Bronner, David Shulman, and Gary Tubb. New Delhi: Oxford University Press, 35–70.

横地 優子（2008）「サンスクリット詩の理解に向けて」『多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として』（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書）所収（pp. 101–114）。

Jaiminīya-Brāhmaṇa 3.190 と Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa 14.4.7
——平行伝承の構成と叙述——

廣瀬 勤
（京都大学大学院人文学連携研究者）

Jaiminīya-Brāhmaṇa（JB）3.190 と Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa（PB）14.4.7 は、Vaikhānasa たちの殺害、Indra による探索、サーマンの発見と蘇生を語る平行伝承である。両箇所は多くの表現を共有する一方、PB が過去の出来事を一貫して Imperfect（Ipf.）で語るのに対し、JB は Ipf. と Perfect（Perf.）を併用する。本発表は、両箇所の内容と表現を対照し、物語の構成と叙述の特徴を明らかにすることを目的とする。

まず、両箇所の原文と訳を示し、祭式上の文脈とサーマンの由来を確認する。その上で、殺害と探索、Rahasyu の告白、atho āhuḥ による別伝の提示、願望・発見・蘇生、命名という各部分について、両版の表現上の共通点と相違点を示す。

特に注目するのは、各部分における時制と小辞の使用である。JB では、殺害と探索が ha を伴う Perf. で語られる一方、Rahasyu の告白（syo vai … amārayat）、別伝、願望・発見・蘇生の定型、命名節には Ipf. が用いられる。この配置を、JB の物語時制についての Whitney（1892）と Caland（1915）の観察、および Vādhūla-Anvākhyāna の物語について出来事の叙述と主張・説明・対話を区別した後藤（2004）の分析を手がかりに考察する。

Witzel（1989）は、JB の物語の Perf. を東方からの用法の広がりと結びつけ、PB の Ipf. には古風な叙述様式の保持を認める。この考察も踏まえ、両版の時制の相違を直ちに成立年代の前後に結びつけず、それぞれの本文における表現の働きを記述する。これにより、共通する伝承内容が両文献でどのように語られ、出来事の叙述、発話、別伝、サーマンの由来説明がどのように組み合わされているかを明らかにしたい。

参考文献

Caland, Willem (1915). “Over en uit het Jaiminīya-Brāhmaṇa.” Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen, Afdeeling Letterkunde, 5e Reeks, Deel 1: 1–106.

Caland, Willem (1931). Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa: The Brāhmaṇa of Twenty Five Chapters. Bibliotheca Indica 255. Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

後藤敏文 (2004).「新資料 Vādhūla-Anvākhyāna の伝える『Purūravas と Urvaśī』物語」. 神子上恵生教授頌寿記念論集刊行会 (編)『インド哲学佛教思想論集：神子上恵生教授頌寿記念論集』, 845–868. 京都: 永田文昌堂.

Whitney, William Dwight (1892). “On the Narrative Use of Imperfect and Perfect in the Brāhmaṇas.” Transactions of the American Philological Association 23: 5–34.

Witzel, Michael (1989). “Tracing the Vedic Dialects.” In Colette Caillat (ed.), Dialectes dans les littératures indo-aryennes: Actes du Colloque International, Paris, 16–18 septembre 1986, 97–264. Paris: de Boccard.

ヴェーダ祭祀のマントラにおける *svā́hā* の用法

手嶋 英貴

（龍谷大学教授）

ヴェーダ祭祀文献（Saṁhitā, Brāhmaṇa, Upaniṣad, Śrautasūtra, Gṛhyasūtra）が伝える讃歌や呪句、祭詞等（本発表では合わせて「マントラ」という）においては、‘*svāhā*’という語が頻繁に用いられる。従来の研究によれば、この語は、祭火中への供物の投入に際して唱えられるマントラ（*homamantra-*）を締めくくる間投詞であるという（例えばL. Renou 1954, *Vocabulaire du rituel védique*: s.v.）。またそれは幸福や安寧を願う言葉であり（Böhtlingk-Roth, PW, s.v.）、ドイツ語で ‘Heil!’（英語: ‘hail!’）や ‘Segen!’ などと訳されてきた（Mayrhofer, KEWA/EWA, s.v.）。用法面では、与格（dat.）形をとる神格名にこの語を添えることが多い。

しかし、ヴェーダ祭祀文献が伝えるマントラを広く見渡すと、こうした従来の説明に必ずしも収まらない、多様な ‘*svāhā*’ の用例が見られる。それらを総合してみると、‘*svāhā*’ の用法は、それが含まれる文の形態に従って、（若干の例外を除き）概ね以下の四種に分類できると思われる。

1．与格（dat.）+ *svāhā*
　文脈上の機能：或るものに（dat.）敬意を表す／献供を差し向ける。
　例：*agnáye svāhā, sómāya svāhā*「アグニに*svāhā*、ソーマに*svāhā*」（神格名 + *svāhā*）
　　ékasmai svāhā, dvābhyāṁ svāhā …「一に*svāhā*、二に*svāhā*、……」（事象名+ *svāhā*）
2．〔*svāhā* +〕対格（acc.）+ 与格（dat.）〔+ *svāhā*〕
　文脈上の機能：或るものを（acc.）或るものに（dat.）捧げる／献じる。
　例：*svāhā tvā prajāpataye*「*svāhā*、汝をプラジャーパティに」；*barhíṣe tvā svāhā*「祭草に汝を、*svāhā*」； *svāhādhím ādhītāya svāhā*「*svāhā*、思念を思念されたものに、*svāhā*」
3．主格（nom.）+ *svāhā*
　文脈上の機能：或るもの／ことの実現への願望を表す。
　例：*ihá rántiḥ svāhā, ihá rámatiḥ svāhā*「ここに快い滞在が［あれ］、*svāhā*。ここに快い滞在地が［あれ］、*svāhā*」
4．文（pres./ipv./subj./opt.）+ *svāhā*
　文脈上の機能：ある事柄の実現への願望を表す。
　例：*brāhmaṇam ahiṁsīr brahmahiṁsito ’si svāhā*「汝はバラモンを害した。汝はバラモンによって害されたもの［となれ］、*svāhā*」

本発表では、上記四種の分類に即して用例を紹介するとともに、‘*svāhā*’を含むマントラが唱えられる個別の状況にも目を向ける。それを通じて、‘*svāhā*’の発語が担っていた儀礼上の意義・機能を検討したい。

学術大会オンライン参加の事前登録サイトへは、
以下のURLあるいはQRコードからアクセスできます。

You can access the pre-registration site for online participation
via the URL or QR code below.

https://kyoto-u-edu.zoom.us/meeting/register/yGDCCWkiREefVyTbpZKjHg